碗久松山物語

五

へ13
3916
5

門へ13
3916
巻 5

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

碗久松山柳巷話説巻之五

東都　曲亭主人編次

仇ゐ養ふ事有無之助父ゐ遭家を起す

蕪婆さゞ家ゆゑ三人の婦女横死せしゐよろこく彼婆さゞ松山親子ゐ殺しを人も有り又碗久ハ松山ゞ結髪の夫ゐるよしを聞の長伴人笑うゐる事うねき人の死跡を聊も難ふべきゐあらぢくこゝゐ碗久主従ゐうち任し後のゐうをどもそまぢ隨意ゐ行せうさるゐらゐハ太郎ハ彼家の按女ものいらハにハ身の暇をもらしてものゐく故郷へ飯し遣し又野崎松山蕪婆さゞ亡骸ハ實相寺ゐ葬ふ追善形のごとくゐ営さ碗久ゞ父死

石宗達が墓なり。彼寺は建る所。今浪花八丁目寺町実相寺の本堂より東南の方に宗達之墓とて四ヶ字を彫る石塔あり。彼所の人いとなむも碗久が墓なりといへり。いまだ是なるを知らず。されども碗久は松山が死して後何ぞ狂ひ物狂ひ有りて或は笑ひ或は悲しむ。行状日来ゆも似ざりしかば。八太郎はいと苦しくなりぬ。さまざまに諫めども。その効あるべきも。あらず。このころ伊勢國久保田の近郷六大院村なる西念寺同宿の老法師。空我上人とぞ。えしは元来權智不測の聖僧なりとぞ。衆生済度の為二人の徒弟をもて洛に上りて彼此の良賤男女に十念を授ゆるに種々の怨霊鬼病に至るまで法験あらざるなく。その蔭を蒙るもの多し。八太郎はこのことを傳へ聞て空我上人の僑居しける空也寺へ詣で上人に拝謁し蘭折の悲しみを今は乱れる碗久が身の首尾物がたりとなん加持しけれども彼西念寺は空也流なり。無婆塞が前夫服部捕次が菩提所なれば。上人は松山親子がことを聞くに。隣なる且碗久をも対面せばやと一議ありしかば。兼引のひ。さて八太郎は對面して宜の事ども。蕪松山が亡魂を済度しこの弱人を教化すべき因縁あり。倩夏の淵源を按ずるに。すべてこの件の殃危は摂州有馬の妖婦が祟にして。その悪霊を鎮めずは碗久が狂病終に愈がたからんなり。来年の今月は

西念寺へ飯るべう思ふて汝が主を立ちに預けよ。そのところにゆくべし。

験あるべしと説示しゆゑ八太郎は篤くその庇を歓び喜べり。

聊も裝ひずその身も洗はありてそのまゝ世をうつす日ゆく迄

たる些の銭を碗久が衣食の料ゆとて過半は上人に進らせ残りく

て碗久は空我上人の憐愍を蒙りて空也寺の客舎にありと

いへども只放に漫行するを上人も又制止めず今茲も冬の来

りて空也忌十一月十三日に程ちかしの壺

盧子を手ゆの碗久はうつくしみとを愛翫ひ頭ゆ帯衣の括

び巾を載き身は垢入る浅黄縮緬の藍衣をまとひ

紋紗の皂き十徳を被て彼瓢子を杖の頭ゆ掛け鉢敲のお扮と

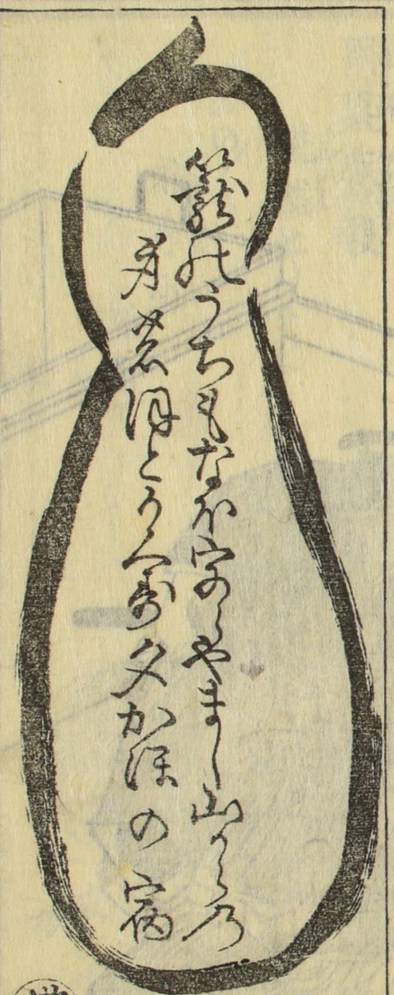
人の門に立ち大小の童子その後方に跟て手を拍す声と賈し

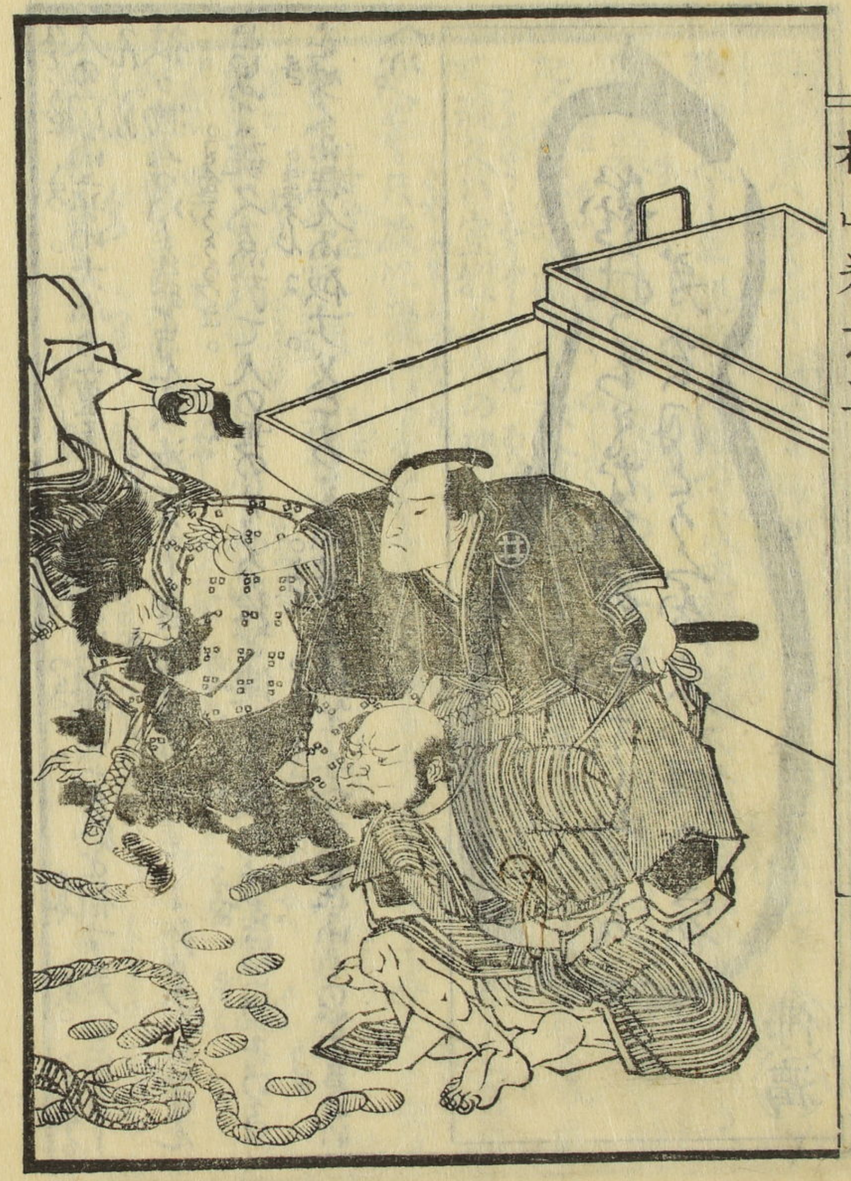
彼が物ゆるはいきをうて汝をしき物ぐさりを世ばよ死ぬのまらせん

と云ひて碗久点頭て人の世のたるを速仏の教の尊きを説その

在家人は狂人に似ず又ところゝゆ筆と紙を手へくとをゆめを書さい

へば。





因果應報
現然とーく
おの〳〵
非命ふ
死も

と書て筆を擲ちしかりも世に出去つらねその手跡究て拙なる
らずとハいふならバ由緒ある人の色情ゆゑなどふかくつゝみたり
しんえくなくてひそかにもらしくと綽号せり按ずるに新氏の風
に鳴さへぐも是空生滅の譬に應し又かしくとハ恐惶の和訓にて
女子の書翰にかしくとかくは結尾とするぞの男子の簡牘に恐惶
謹言と写すがごとしと是を入のうへに此名バかしくハ終をおそれなき
るくの謂なり且山がらの一首ハ夫木集に見えて寂蓮の哥なり
とのうと天野氏が塩尻或問帝王編にも引又高津の契冲師が
河社にも載られハ哥のところいと愛しゝ名バならん碗久が父
宗達ハ和哥を嗜め碗久も生て歌書を好て讀しとりといふなり

くのごとくならバ是も生て一畸人といふべし是ハさそ石死図平の
直六ハその夜蕪婆くが家にて追放され此首彼所に立ちのび
しが面もそり妻子の自殺するをきくも露しらずりも後悔慚愧
の氣なくく身の老死ところなきにつくづくと思ひ井が
年来貪り貯ふる金の蛇となりしハさまおのが心の惑ひにて
実に蛇となるにハあらず。しかしながら件の不思議に害怕て。
金とハ擅ヘ納めく共に土中の物となりしといふものへあるハ虚
言にもおがれたりやみたる程にハなくとも松山が擅にハ衣裳
髪の飾かんざしよ死の多かるべしかゝる物のひそかしく夜臺に
ありて朽果なんハいと惜むべし人ちまたハ奪ひもらバやと悪心

更ゐやすもて頃しも三月尽の風雨恐しき夜ゐ移さその墓
呼ゐ潜び入るもく件の棺を發んゐ蒸婆くが棺の中ゐハ一
物もなく金ハ松山が方にあり。さるべきそ大ゐ歎びゆゑて
その金も衣服もおりるくろもく棺をば舊のごくにし土を掩ひ
石を建辛じて生塚を潜つ出るに雨止風軟く月ひとあくるり
ハさて荒陵の森の中に金をもて見ひらぐるに石の上ゐ紅ろ
甘ばこハいつゐ金ゆハゆらぐきのゐ生まくるゆゑ赤子ゆく
泣声頻りるゐに驚き忙走らを退つ又立ゆぐろもくふてびるに
るぶ感ゆもあらびるち返しるるで寸まぶを金ゆるらで。ちるも
男児るりしらば忽地ゆ[illegible]。松山有多て八月ゐるりぬ[illegible]

つるを。るるを長櫃の中ゆありて笑くるぶ。さそハその子母の疵口より
産まて死もゆらず棺の中にあり。るを鈍くも金るりを思ひ悔
つくくとてまでもて来つるとを腰くくしるまをひくりぐちふく
望ををうしるひく足ぞゆゐ走り去るゐ彼赤子を抱きくる故
ゆ胸のあくりハさらるりるも足も癖くて堪ぐくられぐとれ
ば物もなびるれハ次の日又彼森にゆるくれば。
怪しきるくつの燕彼此を花揺しつ何ゆらん衝まく赤子
のロゆさしー入るくるのさるぐらるのぐ雛鳥を養育ゆ似くり。夜
双悪鬼をも驚くるる直六もものくおそろしくるびるて樹間を
徒くつく走り去らんとするゐ手足猛ゆ癖麻をく一歩も運び

動くごとに驚き怪みて、又舊の所へ立戻れば手足いと
遲らかくするを數回ゐるのみ只引戻さるゝ事なるがえなく
森を出るゝことを得ざりしが母愛惜しと思れ
ゐ養育せんが爲ゐ考すると思しつゝ赤子を抱きて
森を出るゐ然も忽地ゝえずるりて道をやくと常の如しく
つまづくば直六ハとなる紀悪心を發せしより彼の逃さうげるき
嬰児を養へばいくらひらいぶせく思ひて棄もしかも殺さん
とするゐ總身麻痺して酔るごとしとをのく手を下しゐず
咳きるぐら養育に全體の癖と日ふもしく堪ぐこく撥ば蒼と
なりて膿汁流れ出逐ゐ肉脱眉毛落ち舊の面影ハるく足ハ

蹶の下より爛拔く膝のくゝ歩行るゐに木履を着く四足の獣
に異らず畜生道の苦をとの世ゝら稟るのゝるゝ慈悲ゐ
人ゐ一碗に飯を乞得てもまづの嬰児に飽まで与へその後
食せざれば一粒の飯も咽喉に下らず。と云ふ又餓鬼道の苦難
似たり。さればとの妻を虚人を殺し亦美理ある子を誘ひ賣
し。その後碗屋の家ゐ仕へ彼家を負ひ剰主の碗久を切く
金を奪ひ去らんとすゝる悪報やゝくゝゐ環来く。松山ゞ爲
にその子を養ひ且世ゐ稀なる悪疾を患さるるべしさるを
直六ハ浪速津を徘徊して人ゐ乞ふ乞ゐも。さすゞゐ面るくや
あり久し次の年の秋ゐ至りく洛へ上りて鳥辺野のゝほとりに乞

食して惜らくは命を縮まぐに彼雅子いけや大きゆふるりく。
這もるらひ立もする程ふるりとの時空我上人ハある日田井
八太郎を呼びよりて宣の母うとをちに西念寺に飯らんと
思のよりく豫て汝ハ編母ーでく某の日妬婦ぐ怨夏を済度
し碗久ぐ災害を禳ひ給ふすべーもるとぞもそのる容易ハ
ーぐて。先四條河原ハ假屋を構て都下の乞食ハ施行ー
寛恵の追福を営ひべーとて准備ありやを問ふて八太郎
答へて。松山ぐ母蕪婆く如此くの願あるく子安の観音堂を
作ふうえん為ハ年来積貯ふる金銀あり是則子孫冀士の
銭淫奔禍媒の賦るに縦彼堂宇建立の料に寄進すれ

ども菩薩の受のハどを思ひしらば。いまぐそのを真を企奥べし。
一銭も散ずして密ハ秘おけりとをや施米の料ハいてーい
ろくとの上人点ずく。その金ども人ハ施すべきものるれ墻を
建立し僧を供養せんよりハ貧者を救ぬの功徳ハ莫大なり。
今その金を悉く世の窮人ハ施ーるバとの功徳ハよりく彼
堂を造りうゆる助を汝満く月の出るぐ如ん速ハ
用意せーと仰すをバ。八太郎ハ果く次の日より四條河原
假屋を構殿の米銭を積入て用意既ハ整ひるをバ空我
上人ハ二人の徒弟を碗久を將く件の假屋に到り大きゆふる
懺を造りて為摂州有馬湯本藤松先大母妬婦施行施主宛石

氏児碗久妻之母清春尼と共に三十字を書写し出居の方に立さしめバ浴中浴外の乞食ホ磯の如くホ集合来くこの施に洩るくことなしくて第三日に到つてくく施行も限りとなり。その日の曛昏ホ一人の乞食手足ハ腐爛きて餓息のごくるが二戈だるりるる推子を拾ひくさせるる車に乗つてまづくら乞を押当ひつく来まりとの朝碗久いとら清くしくるりーくバ。八太郎とともに端ちろく出て乞食ホて物をもら母て居たりしが件の推児碗久をんく車より這下つて携着まハらぬ舌ホ爰くと呼びくけくその裳ホまろハりんをバ碗久主従ろく怪を彼乞食ホ對ひて汝ハこの推きめく父るり母を問ふ。

乞児ハ涙を潸然と落し。されバハ僕が子にあらず。さるハち松山が死の瘢口より生まれたる君が一子なり僕ハ雛病に係りて面影も変りしかバつひに忘れまひけり燕婆々が後夫にきたれど。めハ服部團平と呼まいる直六が身の果にてはぞや。またまふなせし悪虐の終にハ報ふ因果物語首とのへバ箇様々々尾ハ如此々々なりとて。松山ホが指を発きし古又稚児のなる燕のかすべておちもなく聞えきらするに八太郎ハさらに碗久大ニ驚きあやしみ頻ニ嘆息していたりけるが。なし直六ハ松山を誑き売ッたるをあく今又松山が子を養へり天の人を罰しまの支遅速ハあれと己に出るもの己に返らざるハなし。嗚呼おそるべきなりけりて。

ありく浮世を観ずる折しも一人の旅客仮屋のうちにすゝみ入りて碗久主従に對ひ某ハ有馬の湯本なる藤松といふものになりいりしその夜ゆめうしき夢をみたり壁ハふるの燕枕方に来りて告ていふやうこれハ汝が先祖ゆく松二郎と呼れしものなり又となるハ愛妾に藤といふ女子なりし家期の愛惜によりてものなるがもに燕と生れ年々に家の簷半に巣を営みたるが嫡妻妬婦が怨霊蛇となりて巣に跂登りて卵を咬みしこと数回なりしに究石宗達といひし今ぞ雛鳥を愛するのあまりある夜件の蛇を打殺して捨たりしが終に妬婦が祟りにたくく寃枉に死し家も絶たり

きさてあまりこの子を愛するひしひし好意の喜しさに忘れがたく。その恵を後さん為に去年四月朔日その人の孫を養育まつり直六といへる悪捉を懲らしてこのうるわしくその嬰児を双抱させ支めり。もろもろに今度善智識の引接によりて吾倩はいまさらなり。妬婦が怨霊仏果を好くなるべく天堂に生ずべき速に京師四條河原に赴き彼の聖僧に渇しく謝しまれとのり。さてもかく某その夜の中に旅ごろく只管に路をいそぐ。とふ至つくこの幟をうるに果してこの曾祖母妬婦がみるに作善の施行をものゝ中をもとりとはもらざるの僥倖にて。その歓喜いくばくして言語に述尽しがたくとそとはいへ碗久はとまをなくて。八太郎は顔をうるあはしつつ。まことに奇なりキして。藤松はいへいやうとの事大に故あり。そはもろくなりもく。父宗達がこのうるこの泉。松山親子のこの。観音堂修覆の情厚あつまりの延も審にいなそもちまつ。藤松いへく嘆息しさそはひしこの家に来く湯治しのる時常花と假初に妹夫の結びを色のる。その人にく坐せしに定に妬婦が怨霊の物に触てはの執わくて駿の人に出りぬるで浅ましきもろに思ひもうけぞ。聖僧の引導にて怨霊得脱せしこの自他の大慶とまてふるこの報ゆ。あの主力を合して子安の観音堂を造り更いべしと。いへ浩所に旅装もくる一人の武士向より假屋の門外に立在て

一五一十を窮究し。ずく笠を脱く裡に入るを見て。別
人にあらず。鳥屋尾七郎二なりしかば。碗久主従と思ひもよら
ずく上坐に迎請じ。別後の恙なきを祝すれば。七郎云ふ。
某主君の仰を稟く其許の在家を索めぐるに。稍久し。速
に皈参して宛石の家を與へ人といつて。碗久答へ。父が罪を
きるの咎えて君に後悔あるべしと。ハ反に怒りて。強懐を遺
ふ似くなれば。某商人なりしかば。且狂病によろく駁の人と
面をうんらなしかば。舊の武士にあらん事却懐しのとの推
児が成長の後家を継しめらば。恩沢すべく甘心すべし。
父ハ無漏路に入らんを願ひ子ハまた有漏路に出るなれば今

よりしたとなれば。名を有無之助と改めしに。犯すべくこの
待ちをいへば。七郎二点ぜて。その事に干てい易くなるひの。
その子成長のくらを待ず。直に宛石の家督くらん事。仔細有
べくらず。慮りそのを空我上人ハ端近う出て。七郎二藤
松に對面し。碗久をうんうりく宜ふ。藤松とやらんが力を
合して。観音堂を造りうんといの支大ふ。是併汝只今
ならずも。その方人を設くるを。施行の善報なれば論
回報慮の理ハ響の声に應ずるがごとし。ちのひうんく宗達ハ。
不慮の戯言によりく殃危を釀し。将松山が生涯を誤てり。
そをのくその身宋裏の仁に斃を碗久まく微生が信に

譏りを憑り且服部捕ゆ少が貪婪ハ佛に詭るをもて。その家を圓平に倒さ。その妻も終ふ横死す。野嶋が自殺ハ淫奔の餘殃なりと云るを聞いて恨むべき死なるゝ。然と又ども野嶋が最期の忠義ふよろく。その子に八太郎あり。松山が稀なる若節よりよろく。死後に一子を産つ正ふ是大慈大悲観音薩陀の冥助なり。蕪婆くいその子を愛惜し。前の夫の夙願を果さんとく。珏汚の賊を貪るふよろくその子を殺し。軀も隨て又ふ伏す。當に知るべし。冥福ハ金銭を以く買がたし。さハあれ。彼をのをろ善悪相半し。とを贖ふふ。松山が孝と貞とを以くすとふ於く菩薩の冥助

ありて。揮の中に一子を送神仏ふ払ゆし。凡夫頑愚ゆして公道と私情を分別せず。無智なるが故ふ思ひ惑ふと多し。豈悲しからずや。昔宋裏河を渉す兵を撃ず。尾生橋梁を抱て死す。その仁と信ふハ違ハず。ろ是ども行ハをろ道に稱ず。所謂碗久父子が蔽とまふかゆ。惑くりをいひつべ。又夜圓平が悪虚ハ更ふ比るふ物なし。いろふ圓平の直六を殺ん揮を發く嬰児を養ひ悪疾を稟く路傍に餓死し死の人。ふれ生を貪つく悪をるさんや。將死を索て苦難を脱んやいろふく。を問ゆ人ハ。直六忽地車より滾び落て地上に拜伏し。僕実ふ一日も存命んとをおもハず上人願くハ

救ひ給へと叫つゝ改を叩き血の涙を流して悔歎しゝが上人ゆゑに
屢を穿てそのかたゝに近く立ちぬ。善哉懺悔するハ五逆十悪の罪
を滅す〳〵。今や諸の亡魂既に得脱すいざゝ汝一人を濯すべ
き宣ひてするハち如幻の喩を吟ずらく。

吾観諸法譬如幻　一箇無明諸行業　三種世間能所造　非空非有越中道
春園桃李肉眼暗　楚澤行雲無復有　繦是衆縁所合成　不中不外惑凡情
十方法界水連城　三諦宛然離像名　秋水挂花幾醉嬰　洛川廻雪重還輕

封著狂迷三界熾　能観不取法身清
出哉迷者孰観此　超越還帰阿字宮

吟じ了て念珠を揚直六ゞ改を打ゝハ首まゞ落て膝下に滾
び千足段〻に分散るを見て〻皮肉ハ化して水となり白骨のみぞ
残つるゝ折しも何所ともなく一隻の蛇ぞ雌雄の
燕と飄〻千て空中に飛揚り忽地三蒂の白蓮花と化し西の靡
きて失にゝれバ衆皆驚怪〻さてハ怨夷得脱疑ひ
なしそ歓喜雀躍て堪さりぬ。くて空我上人ハ次の日空也寺を
辞し去て二人の徒弟を倶し西念寺へ飯りゝハ鳥屋尾七郎次ハ碗
久父子と田井八太郎を伴ひて上人と共に故郷へ立飯るゝ藤松ハ

なれ伊勢まで慕い出ぬさる程ゐる屋尾七郎次ハ白米の城ゐ入つて碗久を城主忍齋に拝謁さ〜敗走松山蕪婆く閑平ホど一五一十且空我上人の法験ゐ至るまで審に述れば忍齋大ゐ感嘆〜て聽て碗久ど一子有無之助をもて祖父宗達ど家督を嗣〜所領舊のごく宛行ひ空我上人ゐハ坊領を寄附〜又一宇の坊舎を建立〜て碗久をこゐ住〜七郎次ゐも引出物多くぬこて碗久ハ彼此を券縁〜て子安の観音堂建立するに藤松ハこゐ白米の城下に逗留〜数百金を出〜て。その作事を助け大宮忍齋も又数多の良材を寄進せら〜程ゐ日ならず子安の堂宇成就ちく奇麗壮観一州に冠〜り。こゐ於く藤松ハ空我上人に拝辞〜碗久主従ゐ別れて有馬へ立帰り〜て。ちく伊勢へ消息〜て親戚のごく聴く久ど碗久ハ空我上人の弟子となりて法名を空瓠と唱へ父母ハさら也敗走松山蕪婆くホど菩提を弔ひ主家の武運長久を祈つて。齢六十余歳にて大往生を遂げ。これより先八太郎ハ有無之助を守傳ゑまちく忠義を尽〜れば忍齋ちく〜を伝授ふく賞美て鎧一領太刀一振りをゐ有無之助成長の後ハ直ゐ城主へ奉公すべき旨を仰するゐ。八太郎ちを固辞く従ずさるゐこてその近国ゐ隠ゑちを鞭忠を称賛さるハ〜り〜て宛石田井の子孫振くて繁昌てその家幸福のく多〜り〜ちり伝へ久ちゑ。勿あり證ち。

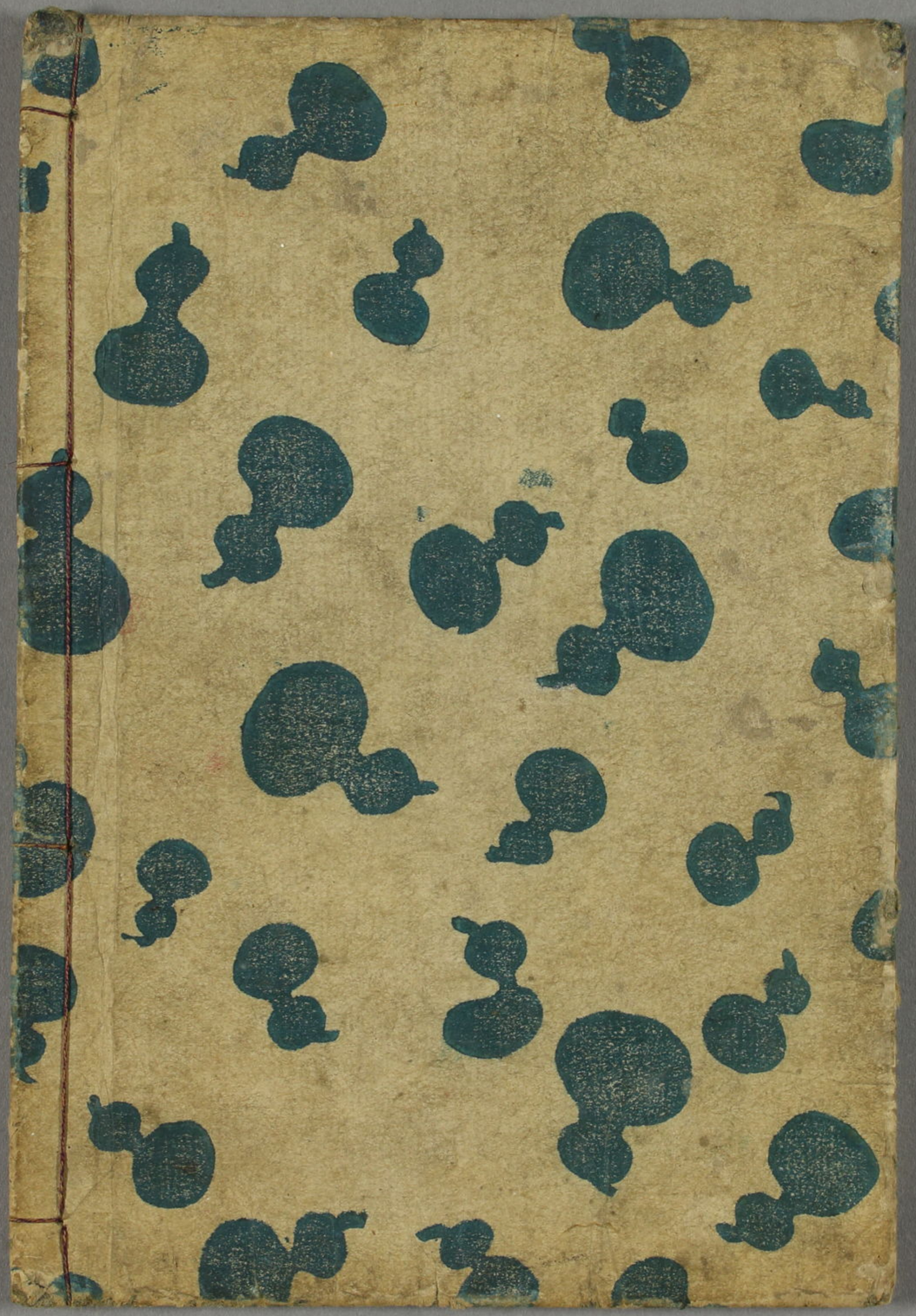
千ちのこれうちひらく小まろ丸

○この幾句ハ。ゆゑ寛政九年。家兄羅文千句満尾の日咏ずるをもろ〳〵予この書を編まるの日舊友何ぐ〳〵來訪〳〵。不意ふ家兄が千生瓢の句を听ぞとゝもに更ふ哀感の情ふ堪ず。遂ふ緑ゝ局を結べり。家兄名ハ興吉東岡舎羅文と号す。性俳諧連哥狐嗜く風詠最多〳〵。寛政戊午八月十二日没す。享年四十歳。その次興春己亮亭鷄忠と号す。性紙孝にして書をよくす。亦是不幸短命天明丙午八月四日没す。時ふ芝蔵馬琴不肖ゆゑ名をろくをもろなり。掌稗史を作つゝ賢愚邪正人生の壽妖禍福得失善悪應報の理を述る毎に然〳〵とゝ

もゞくらゝその不文を歎じ。二兄を景暮せざるゝこゝろ。人生五十年孰ゝ一編の小説にゆらざる箕ハ世の童子ふ偶予が出思の作書を閲して善を奬し悪を懲らすゝ為ぐ。その意を警し人を警むるの本意遂ゝ難ん今とゝふ著す碗久話説ハ。その淵源絃く攷索すべきものゝ。元日金年越ゝ浄瑠理本に碗久が文を作まり是ゝ。そゝ〳〵るらんゝ。もゝれぞも艶曲猥褻なるを諱く取らず。只古老の口碑に伝るをもろにして新ふ作設ゝる物ぐゝ。

柳巷話説巻之五　大尾

貸本

文化五戊辰年　元板
文政十四辛卯年　正月再板
東都　書林　丁子屋平兵衛
浪華　書林　河内屋茂兵衛

和漢
西洋　書籍賣捌處
群玉堂河内屋　岡田茂兵衛
大阪心齋橋博勞町角